

で頑張りました。(畑の中に埋まっている木の抜根作業です) 本当に苦勞の連続でした。住宅は十二坪くらいのバラックの建物で、吹雪の夜等窓戸のスキ間から雪が入り顔にかかって寝付かれない夜も何日ありました。

井戸があったのですが掘り方が浅いため酸性が強く飲めないので隣の家まで(約百メートル)水をもらいに行くのです。これも一か月くらい続きました。大変な苦勞でした。井戸を深く掘ると良い水が出るのですがお金がないのでそれも出来ません。もちろん風呂場等はありません露天風呂です。鍔釜の小さなのを風呂釜に使い酸性の強い赤い水を使用入浴するのです。

冬はとても寒く風呂から出るとブルブルからだが震えてすぐ風呂から出ることが出来ないのです。

整地した泥炭地に作付してもまだ十分土地改良が出来ていないので、お金になるような作物の収穫がなく生活が苦しいので毎年十一月初めから翌年四月末頃まで造材作業に子供等三人出稼ぎです。そんなことを繰り返しながら斜里町へ移住してから十年の歳月が流れ、その間の苦勞はとて私の拙い筆では表現出来ません。

斜里町に移住して十年後の四十四年頃から土地の改良も徐々に出来、お金になる作物が収穫出来るようになり、現在なんとか安定した経営をすることが出来るようになりホットしているところです。

農協や部落の方々の信用も得て今孫がこれを引継ぎより良い模範農場にするため日夜頑張っております。

次代の平和な礎となった人生に満足

北海道 伊藤 清治

居住動機と家族の状況

樺太に生まれ樺太に育ち父の経営する雑貨店が当時繁昌していて自分の発育盛りは何ら不自由のない生活振りでした。しかし昭和十二年頃から次第に戦争が激しくなり召集をされて行く若者が多くなって、世相は軍国色となっていくありさまでした。こんな時代の自分等のような若者は戦争はそれほど嫌ってはいなかったと思えます。かえって参戦し、国のためにつくしたいという愛国

心が先行していたのだと思います。兵隊検査を待たずして志願をして軍隊に身を投じた者が如何に多かったことか、よくそれを物語っていると思います。

自分も兵隊検査を昭和十四年に受け甲種合格となり日本男子として胸を張って検査場から出て来たことを考えてみて馬鹿なことだとは思っていません。やがて樺太の新設部隊の第一回目の初年兵として独立守備隊、樺太山砲連隊へ昭和十五年一月に入隊することが出来ました。

終戦直前直後、生活の激変

軍隊を満期除隊し、一旦生家に帰郷しましたが、父の将来についての考え方に従って経営方針を相談しすべてを売り払って父の郷里に落着き度いという希望から商品のすべてを売り払って父達は本籍地へ引揚げて行き、その後の家屋や土地等の売却を自分に委せるとのことです。自分はそのまま樺太に残留、しかし世相の急変する当時として容易に売却をすることは困難なために父の親しかった人に買い手があったときに連絡をしてくれるよう依頼をし、姉の住む知取町という所に当分住むことになり義

兄の勧めもあり樺太酒精、知取工場に勤務することになりました。しかし戦局は益々激しくなり町には若者の姿を見ることが少なくなり自分等の当時の判断で戦果を発表される中でその裏を考え憂慮しておりました。そんなある日に、突然国土防衛隊の臨時召集が下令されてその日の夕刻に在郷軍人が王子系の倶楽部に集合となり町の小学校がその訓練の場となり、次の日には町の青年団員や未召集の第一乙種、第二乙種の壮年が約六十人ほど校舎に集まり自分も分隊長として十五人の隊員の訓練を命令された。

その頃中隊長より呼び出されて渡されたのが炭鉱用のダイナマイト五本、それに手榴弾五個でした。勿論これは最終的には自決用であることは明らかでしたが、隊員に知らずことは禁じられておりました。

そうしている内に明日正午に玉音放送があると伝達をされ全員町の電気店の前に集まったが雑音のため聴き取れることは出来ませんでした。その内に連隊本部から敗戦の通達があり、即刻隊の解放をせよ、とのことでした。

しかし血気盛んな隊員の中には早くも王子の鉄工部や

町の鉄工所に駆けつけて鋼鉄で急製の槍を造り、旗竿の先にしっかりと差し込んで戦う準備を整えていたのを見て、自分は戦う道具といえは父より譲られて軍隊まで持って行った、備前長船祐定の日本刀一振りと、隊で支給された、手榴弾五個、それに炭鉱用のダイナマイトがあるだけ。

しかしこれを隊員に渡すことは出来ない。かといって自分だけで処分も不可能と思っていたときにその町を流れる川に架かっている鉄橋の爆破を命令されて、その作業に従事するべく準備をしていたときに町長が絶対に爆破をしないで欲しいと嘆願して来ました。それで激昂する若者の心を押さえてどうにか隊の解散となることがなきました。手榴弾やダイナマイトの後始末に苦慮、ソ連軍が攻めて来たときに使用することのみ考え続け、そのまま家の押入れの中に置きましたが、その後軍政が解けて民政に移管されてソ連人の多くと一緒に生活をするようになり、手榴弾やダイナマイトの始末を早目にしなくてはと焦り住宅裏の土中約一、五メートルくらいに穴を掘って深く日本刀と一緒に土中に埋め込みました。

その後二年、昭和二十三年五月に引揚命令を受けて、真岡に寄港中の雲仙丸に便乗して函館港に着きました。船中で伝染病患者が出たためすぐには上陸出来ずに海上に七日間、その船中で聞いた歌が未だ自分の脳裏からは消えません。

生きて帰ったとは言え、自分の生まれ故郷に帰ることが出来ず、また、裸同様の当時の船の上で一体これからどうして生きて行くべきかを考えお先真暗という感じでした。

引揚げ、引揚げ後の状況

検疫も無事終了して、上陸が許可されて岸壁に待ち構えていた米兵に体や、衣服の消毒と頭からDDTを振り掛けられたことを自分や人の真白くなった姿を見て泣き笑いをしたくやしさが頭から離れません。

すぐ函館の引揚者収容所に連れられて来て一週間目に行先が決まり自分の場合は父の住む所と思っただけは見ましたが、戦中既に昭和十九年にB29の大爆撃があったことを樺人在住中に新聞で承知しておりましたので、一度無縁故の形を取り落着き先を決めてから父の所在を確かめ

ようと思ひ福島県上川崎村という所に落着きました。

しかしこんな村では働く場所がなく憂慮、二本松、福島市と、職を求めて走り廻りましたが、容易に職等ある苦がなく、足を棒にして二本松から歩いて村まで約八キロ、そんな日が続いているときに、戦争中東京から疎開をしていた隣りのSさんという人から闇米の運搬の話を申し込まれて乗り気になり、危険を犯して東京の新宿の飲食店へ売り込み、一寸した好景気に気をよくしましたが、あるとき一斉取り締まりを受けて現物を列車に残して難を逃れましたが、それを機会にSさんに話をしてその後闇販売をやめ、本籍地へ照会してあった父の転居先が判り行つて見たが、父は既にこの世の人ではなく二年が経過していたわけです。

父の生きていることを信じ当時として容易に手にはいりなかつた日本酒と煙草を持参したのでした。父も自分の引揚げを心から願ひ再会ののちにその地で商売を再開出来るように駅のすぐ近くに家を建て土地も約三百坪求めてあつたようです。父も自分も戦争によって生きる道まで変えられたことに終生憤りを禁じ得ないでしょう。

勿論自分だけではありません。数多くの善良な国民を不幸のドン底に落とし入れた。自分等の当時の体験によつて二度と戦争という渦の中に巻き込まれない時代になることを念願し真の世界平和を目指す指導者を見出し出して次の世に貢献して欲しいと念ずるものであり、現在こうして労苦を書く事を得て思いもまた更に新しく浮上して来ます。親しき同年兵や、年輩同志の方が次から次とこの世を去つて行くのを見て、やがて自分にも人生最後の幕が引かれるであろうが、自分の過去の一端が現代と次の代に必要な平和の土台になつたのではなからうかと、自己満足をして心を慰めている現在です。

私の一生を変えた戦争

北海道 斉藤 タカ

私の父は栃木県の出身でした。日露戦争が終わつて樺太が日本のものになつてからすぐ樺太に渡つただけです。そこで私が関口家の一人娘として育ちました。母